

教授研究会報告要旨

〔教授研究会報告要旨 3〕

2015年11月25日

バイリンガル環境に育つ子ども：受容バイリンガルの言語使用とその発達

山本 雅代

(関西学院大学国際学部教授)

「一方の言語について、受容能力、産出能力を備えているが、もう一方の言語については、産出能力を伴わないバイリンガル」(山本、2014: 12)と定義しうる受容バイリンガルは少なくない(Billings, 1990等)が、発話データの採取が難しいため、その言語の発達に関する研究は乏しい。そのような中、de Kellett (2002)は、バイリンガルの言語喪失研究において、一方の言語の産出能力を失いつつも、受容能力を維持することが、前者の回復に重要であることを示唆する結果を得た。こうした研究は未だ尠少だが、バイリンガルの言語研究に貴重な知見をもたらすものであり、当研究もそうした数少ない研究の一翼を担うべく、言語発達・使用という観点から受容バイリンガルを対象に研究を進めている。

研究対象者はハワイ在住の女兒で、日本語の産出が乏しい英語-日本語バイリンガルである。本研究は女兒が3歳0ヶ月の時に開始、来年春には8年目に入る縦断研究である。月1回採録の女兒と母親との会話データを分析、また年2回の面談で背景事情等を聴取している。

これまでの成果を略述すると、

・量的側面：経年に伴い、女兒の日本語について、受容能力はある程度のレベルを保持するも、産出は大きく後退している。また日本語の主入力源である母親の日本語についても、その使用が減じ、英語の産出が増えている。

・質的側面：限られた範囲内での測定ながら、受容レベルでの文法力に、経年に伴う発達が認められない。女兒が母親の発話をよく理解するのは、文脈からの手がかりを有効に活用しているためと推察される。

今後の課題は、女兒の日本語理解のレベルを量質両側面からより詳細に明らかにすること、母親側の言語使用における揺らぎ、すなわち、女兒の日本語使用の減少に呼応した母親の日本語、英語、またコードスイッチングの使用の変動を量的・質的に追跡、分析することである。

参考文献

- Billings, M. (1990). Some factors affecting the bilingual development of bicultural children in Japan. *AFWJournal*, April, 93-108.
- 山本雅代 (編著) (2014). 『バイリンガリズム入門』. 大修館書店.
- Uribe de Kellett, A. (2002). The recovery of a first language : A case study of an English/Spanish bilingual child. *IJBEB*, 5 (3), 162-181.